

第七部

キリストのみわざ

第二十七章 キリストのみわざへの序論

本章の目的

本章は、以下のことを可能にすることを目的とする。

1. キリストのみわざにおける謙卑の段階（受肉と死を含む）を確認し、説明する。
2. キリストのみわざにおける高挙の段階（復活と昇天と御父の右への着座と再臨を含む）を確認し、説明する。
3. イエス・キリストの、すべての信仰者に対する啓示、支配、和解の機能を確認し、叙述する。
4. 贖罪の五つの諸理論を確認し、叙述する。

本章の概要

キリストのみわざは、三位一体においてキリストが維持している役割にユニークでふさわしいものである。時間的に、キリストのみわざには二つの主要な段階がある。謙卑と高挙である。伝統的にイエスのみわざは、彼が行う三つの基本的機能に分類されてきた。つまり、啓示的役割、支配、和解のわざである。和解のわざの基本的な領域は贖罪である。歴史的に、贖罪の意味は多く論争されてきた。贖罪についての異なる説は、さまざまな要素を含んできた。それらの真理は贖罪においてすべて明白に現れており、贖罪の説明に含まれていなければならない。

研究課題

- キリストのみわざを理解しようとするとき、受肉する上でご自身を卑しくしたとはキリストにとって何を意味するのか。そのことは今日、信じる者にとっては何を意味するか。
- 聖書の啓示に照らして、王であり祭司であるとはキリストにとって何を意味するか。王と祭司は全く異なった機能なのか。
- キリスト教信仰の他の諸教理に照らし合わせて、贖罪はどのように理解されるべきか。
- ソツツィーニ主義の贖罪理解によると、イエスの死が満たす二つの必要とは何か、またそれはなぜか。
- 贖罪に関する償罪説 (the satisfaction theory) にどのように応答するか。

本章のアウトライン

キリストのみわざの諸段階

- 謙卑
 - 受肉
 - 死
- 高挙
 - 復活
 - 昇天および御父の右に着座すること
 - 再臨

キリストの諸機能

- キリストの啓示的役割
- キリストの支配
- キリストの和解のみわざ

贖罪に関する多様な説

- ソツツィーニ主義: 模範としての贖罪
- 道徳感化説: 神の愛の証明としての贖罪

安黒務一 未完成下訳

M.J.Erickson "Introducing Christian Doctrine"

メイン・テキストの『キリスト教神学』購入者のみ、KB I 「組織神学」講義補助資料としてご利用ください。

近い将来、翻訳出版の予定ですので、コピーはご遠慮ください。

- 統治説: 神の正義の証明としての贖罪
- 賠償説: 罪と悪との力に対する勝利としての贖罪
- 償罪説: 御父に対する償いとしての贖罪

キリストの人格、すなわち神性と人性について徹底的に研究することは重要でありつづけてきた。そうすることで、キリストがその比類なき本性によって我々のために何をしてくれたかを、より理解できるかもしれないからである。もちろん、キリストは、つねに三位一体の永遠の第二位格であった。しかしながら成し遂げなければならない仕事のために、すなわち我々を罪から救うために受肉したのである。人類が罪を犯しても犯されなくてもイエスは受肉したのであろうと論じる者たちもいるが、それはありそうもないことに思われる。このことはある種の利点を与える。イエス・キリストの人格と本性に関する前理解なしに、彼のなしたみわざを十分に理解することはできないからである。キリストが誰であったかが、彼をそのなそうとしていることに特にふさわしい者とした。これらの知識をもって、私たちはキリストのみわざを理解するより優れた立場にたつことができる。それは、キリストがなしたすべてを単に人間中心の視点から解釈することにまざるものである。

キリストのみわざの諸段階

イエスのみわざをさらに深く探求すると、二つの基本的な段階でなされていることがわかる。伝統的に謙卑の状態と高擧の状態と呼ばれているものである。これらの段階はそれ

ぞれ、一連の行程から構成されている。我々がもっているのは、イエスの栄光から下へと向かう行程、それから先の栄光へと戻り、さらにそれを越えたものへと上っていく行程である。

謙卑

受肉

イエスの受肉は、ヨハネ 1:14 のように、ときには率直な形で述べられる。そこで使徒は「ことばは人となった」と簡潔に述べる。イエスが何をあとに残したか、または何をご自分に受けたかに強調点がある。前者の例はピリピ 2:6-7 で、イエス・キリストは「神のあり方を捨てられないとは、考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられ」た。後者の例はガラテヤ 4:4 で、「神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさ」った。

地上に来るにあたりイエスが破棄したものは、計り知れない。「神との対等性」（ピリピ 2:6 NIV—訳注）という、御使いの絶えざる賛美、および父と聖霊との直接的な臨在を必然的に伴う立場から、それらのものが何もない地上に来たのであった。たとえキリストがこの世が提供できる最高の輝きでやって来たとしても、天からの下降は、やはり途方もないことであった。しかしイエスが来たのは、人間の状況の最高のところではない。むしろ、召使いの、奴隷の

姿をとった。きわめて普通の家族のもとにきた。きわめて名の知られていないベツレヘムという小さな町に生まれた。さらに驚くべきことに、馬小屋というみずぼらしい状況で生まれ、飼い葉桶の寝かされたのであった。

イエスは律法の下に生まれた。律法の創始者であり、その主である方が律法に服する者となり、律法を成就したのである。まるで、下にいる者たちが服従すべき法令を制定した役人が、より低い身分に退いて自分も服従しなければならなくなったかのようなものである。イエスが身を引くことと、律法に服従する者となることは完了した。こうして生後八日目に割礼を受け、ふさわしい時に母のきよめの儀式のために宮に連れて行かれた(ルカ 2:22-40)。律法に服従する者となることにより、イエスは律法の下にある者たちを贖い出すことができた(パウロは言う(ガラテヤ 4:5))。

謙卑の期間の間、神的属性はどうであったのか。すでに(〇~〇頁)、三位一体の第二位格は人間性を加えるか取ることにより、ご自身の中から神と等しくあるということに含まれる一切の榮譽を空にしたのであるということを示唆した。そうすることにおいて、イエスは神的な属性を単独で行使する能力を明け渡した。このことは、イエスが神的属性のある部分(またはすべて)を破棄されたという意味ではなく、それらを自

分のために行使する能力を自発的に破棄したということである。御父により頼むことにおいて、そして全き人間性を所有することとの関連においてのみ、行使することができた。イエスが神的属性を行使するには、御父と自分の双方の意志が必要であったということである。貸金庫がよいたとえとなるであろう。それを開けるには、銀行側と預金者側の二つの鍵が必要である。これと同様に、イエスが神的力を用いようとするなら、そのためになすべき行動について双方の意志が同意していなければならなかった。人性というものを前提とするときに、そこに含まれている測り知れない謙卑というものが存在した。イエスが天いたとき所有していた能力のすべてを自由かつ独立して行使することはできなかった。

死

イエスの謙卑において下へ向かう究極的な段階は死であった。「いのち」(ヨハネ 14:6)であり、創造主であり、いのちを与え、そして死への勝利を形成する新しいいのちを与える方が死に服する者となったのである。罪を犯さなかった方が、死という罪の結果もしくは「報酬」を味わった。人となることでイエスは死の可能性に服した。すなわち、死ぬ存在となったのであり、死は単なる可能性ではなく、現実のものとなった。

さらにまた、イエスは死を味わっただけでなく、しかもはずかしめ

を受ける死を味わった。ローマ帝国が極悪人のためにとっておいた刑を経験したのである。それは時間のかかる苦痛に満ちた死、事実上拷問による死であった。これに加えて、侮辱に満ちた状況があった。群衆によるあざけりとなじり、宗教的指導者とローマ兵たちによるのしりがはずかしめの度を増した。死はイエスの宣教の働きの終わりであるように思われた。イエスは任務に失敗したのだと。イエスの声は静かになり、そのためもはや説教することも教えることもできず、そのからだはいのちのないものとなり、いやすことも、死者をよみがえらせることも、嵐を鎮めることもできなかった。

高挙 復活

イエスの死が謙卑の最下の点であることを見てきた。復活をとおして死に打ち勝ったことは、高挙の過程へと戻る第一歩であった。復活は特に意義深い。というのは、死を与えることは、罪と罪の力がキリストに対してできた最悪のことであったからである。死がキリストを捕えておけなかったということは、主の勝利の完全性を象徴している。悪の諸勢力が殺した誰かが死んだままでいないのなら、悪の諸勢力にそれ以上何ができるであろうか。

復活は非常に重要なものであるため、多くの論争を引き起こしてきた。もちろん、実際の復活を目撃した人間はいない。それが起きたときイエ

スは墓の中でひとりだったのであるから。しかしながら、二つのタイプの証拠を見いだす。第一に、イエスが横たえられた墓が空であり、遺体が出てこなかったことである。第二に、さまざまな人々がイエスが生きているのを見たと言ったことである。これらの証言の最も自然な説明は、イエスが確かに生きていたということである。その上、弟子たちが恐れおののく敗北者から復活を宣べ伝える戦闘的な説教者になったことを説明する他の（少なくともより良い）方法は存在しない。

ここで特別に注意する必要がある問題は、復活のからだの本質である。この事柄に関しては相反する証拠があるように思われる。一方において、血肉のからだは神の国を相続できないと言われており、天では物質的からだをもつことがないというほかの示唆もある。他方では、復活後イエスは食事をし、その姿は明らかに認識できた。その上、手の釘の跡と脇腹の槍で刺された傷は、なおも肉体をもっていたことを暗示している。この矛盾と見えるような点を調和させようとするなら、イエスはこの時点で復活していたが、まだ昇天していなかったことを心に留めておくことが重要である。我々の復活のときには、からだは一気に変えられる。しかしイエスの場合、復活と昇天という二つの出来事は、一つにされるというよりは分離されている。したがって復活の時点でイエスがもつ

いたからだは、まだ昇天の際に、より完全な変容を経なければならなかった。まだパウロが I コリント 15:44 で「御霊に属するからだ」と呼んでいるものにならなければならなかった。

けれども、処女降誕を本質的に生物学的なものと考えべきではないのと同じように、復活も第一義的に物質的な要素と思うべきではない。復活とは、罪と死とそれに伴うあらゆる効果に対するイエスの勝利であった。高挙の基礎的な行程、すなわちイエスが全人類の罪を自発的に負うことで自らにもたらされた呪いから解放されることであった。

昇天やよび御父の右に着座すること

イエスの謙卑の第一の行程は、天においてもっていた地位を破棄し、地上の状況のもとに来たことである。高挙の第二の行程は、地上の状態を離れて御父とともにいる位置を取り戻すことであった。イエスご自身、いくつかの機会に御父のもとへ帰ることを予告した(ヨハネ 6:62、14:2、12、16:5、10、28、20:17)。ルカは実際の昇天を最も詳しく記述している(ルカ 24:50-51、使徒 1:6-11)。ヘブル人への手紙の記者と同様に(1:3、4:14、9:24)、パウロも昇天について書いている(エペソ 1:20、4:8-10、I テモテ 3:16)。

近代以前、昇天とは一つの場所(地球)からもう一つの場所(天)へ移ることと通常考えられていた。しか

しながら今の我々は、空間とは天が地上から単に上にあるというのではなく、地上と天の違いも単に地理的なものではないことを知っている。ある種の宇宙船で十分に遠くかつ速く飛んでも加味には到達できない。ここからそこへ移るには、単なる場所の変化ではなく状態の変化が必要である。それゆえ、ある点において、イエスの昇天は、単なる物質的、空間的な変化でなく、霊的な変化でもある。そのときイエスは、からだの復活とともに始まった変身の残りの部分を経験した。

昇天の意義は、イエスがこの地上での生活と結びついた状況をあとに置いたということである。人々が地上で経験する肉体的、心理的の両面の痛みは、もはやイエスのものではない。出会った反対、敵意、不信仰、不真実は、御使いの賛美と御父のすぐ近くの臨在に置き換えられている。地上にいる間のあざけりや非難と何と対照的なことか！

イエスが地上を去らなければならぬ決定的な理由があった。一つは、具体的に何が関わっているかは述べていないが、我々の将来の住みかを準備するためであった(ヨハネ 14:2-3)。もう一つの去っていかねばならない理由は、三位一体の第三位格である聖霊が来られることである(ヨハネ 16:7)。聖霊を送ることは重要であった。というのは、聖霊は彼らのうちでみわざをなすことができたからである(ヨハネ

14:17)。その結果、信仰者たちは、イエスがなしたみわざを、さらに大きなわざさえできるようになる（ヨハネ 14:12）。そしてイエスは、彼らと永遠にともにいる（マタイ 20:28）とすることができたのである。

イエスの昇天は、今では御父の右に座していることを意味する（マタイ 26:64、使徒 2:33-36、5:31、エペソ 1:20-22、ヘブル 10:12、I ペテロ 3:22、黙示録 3:21、22:1）。右の座が、卓越性と力の場所であることにある。ヤコブとヨハネがイエスの左だけでなく右にも座することを願ったことを思い起こそう（マルコ 10:37-40）。イエスが神の右に座することは、休息や活動の休止に関するものと解釈するべきではない。右の座とは、イエスが我々のために御父にいつもとりなしをしておられる（ヘブル 7:25）場でもある。

再臨

高挙の一面がまだ残っている。聖書は、将来のある時点でキリストが戻ってくることをはっきりと示している。正確な時期は知らされていない。そのときキリストの勝利は完成するのである。キリストは勝利の主、万物の審判者となる。主の支配は今の時点ではある意味で潜在的なものにすぎず、多くの者は受け入れないが、そのときには完全なものとなる。イエスご自身が言われたように、再臨は栄光のうちになされる（マタイ 25:31）。低い、へりくだった姿で来た方が完全に高められて再び来られ

る。そのとき、まさに、すべてがひびきをかかめ、すべての口がイエス・キリストは主であると告白するのである（ピリピ 2:10-11）。

キリストの諸機能

歴史的に、キリストのみわざを預言者、祭司、王という三つ「職能」（“offices”）との関連で分類することが慣例となっていた。イエスが人類に神を啓示し、神と人類を互いに和解させ、人類を含む被造物全体を支配しており、また将来そうするであろう、という真理を保持することが重要である。もし我々が、キリストがその働きにおいて達成されたもののすべてを認めるべきと考えるのなら、我々が正確な称号を用いているかどうかは別として、それらの真理を保持しなければならない。ここではキリストの啓示、支配、和解という三つの機能について語ることを選んだ。キリストのみわざのこれらの局面を、キリストの任務として考えることはふさわしい。なぜならイエスはメシヤ、油注がれた者であったからである。

キリストの啓示的役割

キリストの宣教の働きへの言及のうち多くが、キリストによる御父と天的な真理についての啓示を強調している。ナザレでの宣教が受け入れられなかったとき、「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、家族の間だけです」（マタイ 13:57）と言っ

たからである。イエスが預言者であったことはイエスが説教するのを聞いた者、少なくともイエスに従った者たちによって認められていた。さらに、エルサレムへの勝利の入場の際、群衆は「この方は、ガリラヤのナザレの、預言者イエスだ」（マタイ 21:11）と言った。

イエスが預言者であったということ自体、預言の成就であった。ペテロは特に申命 18:15 のモーセの予告とイエスを同一視している。「神である主は、あなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる」（使徒 3:22）。イエスの預言者としての宣教の働きは、神から遣わされたという点では他の預言者と同じであったが、彼らとの間には意義深い違いがあった。イエスは、神ご自身の臨在のもとから来たのである。御父とともなる先在は、御父を啓示するイエスの能力の大きな要素であった。なぜなら、御父とともにいたからである。そこでヨハネは次のように言っている。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」（ヨハネ 1:18）。

イエスの預言者としての宣教の働きは、その独比性にもかかわらず、いくつかの面で旧約の預言者たちの働きと似通っていた。破滅と審判の宣告があり、良い知らせ (good news) と救いの宣言があった。マタイ 23 章でイエスは律法学者とパリサイ人を

偽善者、まむし、蛇と呼んでさばきを宣告している。確かに罪を責める預言者的メッセージは、イエスの説教に顕著に見られた。しかしイエスはまた良い知らせを宣告した。旧約の預言者の中では、特にイザヤが神からの良い知らせを語った（イザヤ 40:9, 52:7）。同様にマタイ 13 章でイエスは天の御国について、それを実際に良い知らせとするような言葉を用いて述べている。すなわち天の御国は、畑の中に隠された宝 (44 節) や、すばらしい値打ちの真珠 (46 節) のようであると。

キリストの啓示のみわざは、時間と形式において広い範囲に及んでいる。まず啓示的な形における働きを、受肉以前にさえ行っていた。ロゴスとして、イエスはすべての人を照らす、世に来ようとしている光である。それゆえ、ある意味ですべての真理がイエスから、イエスを通して来たのである（ヨハネ 1:9）。イエスの啓示的なみわざの第二の、そして最も顕著な時期は、言うまでもなく、受肉と地上滞在の間の預言者的働きであった。ここで啓示の二つの形が一緒になった。イエスは神の真理の言葉を語った。しかしながら、それを超えて、真理であり、神であった。そしてイエスがなしたことは、真理と神の現実性との宣言だけでなく、それらの具体的展示でもある。三番目に、教会を通して続いているキリストの啓示のみわざがある。イエスは彼らに、進行中の任務の中での臨

在を約束した（マタイ 28:20）。その宣教が多くの方法で聖霊によって継続し、完成することを明らかにした。御霊はイエスの名によって送られ、イエスに従う者たちにすべてのことを教え、イエスが話したすべてのことをすべて思い起こさせる（ヨハネ 14:26）。真の意味で、イエスは聖霊を通して啓示的なみわざを継続することになるのであった。多分このことは、ルカが、自分の最初の書がイエスの「行い初め、教え始められた」すべてのことと関係しているという（使徒 1:1）、幾分理解しにくい主張をした理由である。使徒たちが真理を宣言したとき、イエスは啓示のみわざを彼らを通して実行していた、と我々は結論づける。

イエスの終局的で最も完全な啓示のみわざは、未来にある。このキリストの再臨を表す語の一つは「啓示」（アポカルプシス）である。その時にははっきりと直接的に見る（I コリント 13:12）。キリストのありのままの姿を見ることになるのである（I ヨハネ 3:2）。その際、神を完全に知り、キリストが語った真理を完全に知る妨げとなるものは取り除かれる。

キリストの支配

福音書はイエスを王、宇宙のすべてを支配する者として描いている。イザヤは、ダビデの王座につく未来の支配者を期待していた（イザヤ 9:7）。ヘブル人への手紙の記者は、詩篇 45 篇 6-7 節を神の御子に当ては

めている。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です」（ヘブル 1:8）。新しい世界で人の子は栄光の座につくとイエスご自身が述べた（マタイ 19:28）。天の御国をご自分のものと主張した（マタイ 13:41）。

イエスの役割をほとんど未来だけのものとする傾向もある。というのは、現在の我々の状況を見渡すと、イエスが活動的に支配しておられる様子は見えないからである。しかし、我々は、キリストが今日においても支配している証拠があることに注目する必要がある。特に自然界は主に服従している。万物はキリストを通して存在に至り（ヨハネ 1:3）、キリストを通して存在を継続している

（コロサイ 1:17）のだから、彼は自然界を支配している。しかし、現代の人類にキリストの支配が及んでいる証拠はあるのだろうか。確かにある。キリストが支配する神の御国は、教会の中に存在しているのである。キリストは、そのからだである教会のかしらである（コロサイ 1:8）。キリストが地上にいたとき、神の御国は弟子たちの心の中にあつた。そして今日の信仰者がキリストの主権に従っているところではどこでも、救い主は支配者の機能、すなわち王的機能を行使している。

以上のような点から、キリストの支配は、ある者たちが考えているような、単なる最終的な高挙に関するものではない。それは高挙の最終段

階と結びついたもので、その段階では主が力をもって再臨するときその支配が完成する。ピリピ2章の賛美歌は、キリストが「すべての名にまさる名を」与えられることを強調している。「それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、＜イエス・キリストは主である＞と告白して、父なる神がほめたたえられるためです」(9-11節)。キリストの支配が完成する時が来ようとしている。そのとき、すべてのものが、喜び励んでか、または不承不承にか、その支配の下に置かれるのである。

キリストの和解のみわざ：とりなしと贖罪

和解者としてのキリストのみわざの一つの側面は、とりなしの働きである。イエスが地上にいる間に弟子たちのためにとりなしをした数多くの例を聖書は記録している。最も拡張されたものは、そのグループのための大祭司的祈りである(ヨハネ17章)。その中で、ご自身の喜びが弟子たちのうちに全うされるようにと祈った(13節)。彼らがこの世から取り去られるようにとは祈らず、悪い者から守られるようにと祈った

(15節)。彼らがみな一つとなるようにとも祈った(21節)。これに加えて、この最後の祈りは、弟子たちの言葉を通して主を信じる人々のためのものであった(20節)。

イエスは地上にいる間、弟子たちのためになしたことを、御父とともに天にいる間中、すべての信じる者のために続けているのである。ローマ8:33-34でパウロは、誰が我々を罪に定めるのか、または訴えるのか、と質問を発している。それがキリストでありえないことは確かである。御父の右の座にいて、我々のためにとりなしているからである。ヘブル7:25に、キリストはいつも生きていて、ご自身によって神に近づく人々のためにとりなしをしているとあり、9:24に、我々のために神の前に現れてくれるとある。

このとりなしの焦点は何か。一方で、イエスは我々が義と認められるために、御父にご自身の義を提示する。また、前に義と認められたが罪を続けて犯す信仰者のために、ご自身の義を申し立てる。そして最後に、特に公生涯の期間の例からそう思われることであるが、キリストは、信仰者がきよめられて悪しき誘惑者から守られることを父に願っているようである。

ここに、イエスの和解のみわざが基盤もう一つの、さらに基本的な側面がある。そしてそれはイエスのとりなしの基盤を構成する一つの側面である。贖罪において、我々はキリスト教信仰の非常に重要な点に到達する。贖罪の教理は我々にとって最も重要な教理である。なぜならそれはキリスト教神学の客観的な面から主観的な面への転換点であるからで

ある。ここにおいて、キリストの本性から我々のための活動的なわざへと焦点を移す。ここにおいて組織神学が我々の生活に直接当てはめられるのである。贖罪が我々の救いを可能にした。そして我々のこれから先の研究のおもな基礎でもある。つまり、教会論は救いの集合的な面を取り扱い、終末論はその未来の局面を扱うのである。

我々のもつ神論とキリスト論が、贖罪に関する我々の理解を色づけるであろう。というのは、もし神が非常にきよく正しく厳しい存在であるなら、人間は神をたやすく満足させることはできず、たぶん自分たちのために何か手を打って神を満足させなければならないことになる。一方、もし神が「時には人間に少しは楽しみをさせてやらなければならない」という甘い、寛大な父であるなら、人間に少しばかりの励ましと指導を与えれば十分であろう。もしキリストが単なる人間であったなら、キリストのなした働きは模範として役立つだけであり、十字架上の死を含めて、なすように求められたことをすべて行ったという完璧な模範を示す以上のことを人間のためにできなかったことになる。しかし、もしキリストが神であるなら、我々のためそのわざは、我々が自分のためにできることを測り知れないほど超えていた。模範となっただけでなく、我々のための犠牲となったからである。罪論を含む広い意味での人間論も、

その状況に影響を及ぼす。もし人間が基本的には霊的に損なわれていないのなら、おそらく少しばかりの努力で神が求めることを実現できる。それゆえ、指導、励まし、動機づけが人間の必要とするものを構成することになり、その結果、贖罪の本質を構成することになる。しかしながら、もし人間が完全に墮落しており、その結果どんなに願いまた努力しても正しいことをできないのなら、人間のためにもっと徹底的なわざがなされなければならないことになる。

贖罪に関する多様な説

贖罪の意味と与える影響は豊かでありかつ複雑である。そのため、贖罪についてさまざまな説が起きてきた。贖罪の事実に対する聖書の証言の豊かさを考えると、神学者によって強調する聖書箇所は異なる。彼らの選んだテキストは、教理の他の領域に対する見解を反映している。以下に所説を調査することで、贖罪の意味の複雑性を識別できるようにする。それと同時に、それぞれの説自体の不完全さと不充分さを見るようになるであろう。

ソツツィーニ主義: 模範としての贖罪

16世紀に生を受けたファウスト・ソツツィーニとレーリオ・ソツツィーニは、今日ユニテリアンが最もよく代表している教えを展開した。二人は代理的満足または代償

(vicarious satisfaction) という思想を拒絶した。その代わりとして、ソツツィーニ主義者たちは、I ペテロ 2:21 を指し示した。「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました」。ソツツィーニ主義の視点から見ると、イエスの死は人間の二つの必要を満たす。第一に、神への全き愛の模範のための必要を満たす。救いを経験するためにはそのような愛を示さなければならないのである。第二にイエスの死は激励を与える。神の全き愛という思想は、あまりに崇高で、ほとんど達成できないものに思われる。しかしイエスの愛は、このような愛が人間の達成できる領域内にあることの証明である。主にできたことは我々にもできるのである!

ソツツィーニ主義の見解が、次の事実と真剣に取り組まなければならないことは言うまでもない。すなわち、聖書の多くの箇所がイエスの死を賠償、犠牲、祭司性、罪を担うこと等に語っている事実とである。実のところ、ソツツィーニ主義者の好むテキスト (I ペテロ 2:21) の 3 節に続く、次の言葉に注目したい。「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされ

たのです」(24 節)。そのような言及をどのように理解すればよいのか。これに対してソツツィーニ主義者とその確信に立つ他の者たちは、通常、贖罪というのは比喩的な概念にすぎない、と答える。神と人間が意図された関係を回復するのは、我々がイエスの教えと、その生涯において、特に死において示された模範とを個人的に採り入れることによってである、というのである。

道徳感化説: 神の愛の証明としての贖罪

道徳感化説は、キリストの死を神の愛の証明と見なす。道徳感化説を最初に発展させたのはペトルス・アベラルドウスであったが、この説は直ちに支持されることはなく、ホーレス・ブッシュネル (1802-1876) がそれを米国で、英国ではヘイステイングズ・ラシュドールが広め人気を博した。道徳感化説の唱道者たちは、神の本性が実質的に愛であるという立場をとる。正義、聖さ、義などの特質を軽視する。したがって、人間は神の正義と刑罰を恐れる必要はないと結論を出す。それゆえ人間の問題とは、彼らが神の律法を破ったので神が彼らを罰する (まさしく罰しなければならない) というのではない。むしろ人間の態度が人間を神から離れさせている、というのである。

我々の神からの分離と疎外は多くの異なった形をとるであろう。我々の不従順が神にとって痛みの源であ

ることを我々は気づいていないかもしれない。または、今まで起こったすべてのことにもかかわらず、神はなお愛してくださっていることに気づいていないかもしれない。我々は神を恐れているかもしれないし、神との関係の中にある問題について、あるいは世間一般にある問題について神を責めるかもしれない。しかしながら、もし悔い改めて、信頼と信仰をもって神に頼るなら、和解が生じる。神の赦す力に問題はないからである。問題は我々のうちにある。ブッシュネルは、罪を我々がいやされなければならない病気と見なす。キリストが来たのは我々の中にあるこの欠陥を矯正するためであったと見るのである。キリストの死は我々に対する神の愛を全面的に明らかにするためであった。そのような愛を知ることによって、神に対する無知からもたらされる恐れが癒される。

統治説: 神の正義の証明としての贖罪

贖罪に関する前出の諸見解は、神を基本的に同情的で甘い存在として描いていた。神に喜ばれる状態に回復されるために必要なのは、ただ最善を尽くすか、神の愛に応答することだけであるという立場に立つ。しかしながら、神の律法は真剣に受け取るべきものであり、律法違反や無視は軽々しくとるべきものではない。

統治説の見解のおもな唱道者はフーゴ・グロティウス(1583-1645)で、聖職者としてではなく、弁護士とし

て訓練を受けた。グロティウスは、神は非常に聖くそして義なる存在であり、ある種の法を定めた、と理解した。罪とは、これらの法への違反である。統治者としての神は、罪を罰する権利をもつ。罪は生来、刑罰に値するものだからである。とはいえ、神の行動は神の支配的な属性に、すなわち愛に照らして理解しなければならない。

グロティウスによれば、神は人類をその罪のゆえに罰する権利をもっているとはいえ、そうする必要性や義務はない。法を緩和して、違反ごとにはっきりした刑罰を要求する必要がないようにすることは、神にとって可能である。しかし神は統治の利益を維持するような形で行動した。ここでの神の役割は、債務者または主人であるよりも統治者である。債務者は、望むならば債務を帳消しにするかもしれない。主人は自分の意志によって罰したり、罰しなかったりするであろう。しかし統治者は、規則違反を単に無視したり見逃したりしてはいけない。むしろ自分の権威の下にある者たちにとっての最善の益を目的として行動しなければならない。それゆえ、贖罪が罪の赦しを提供し、それと同時に道徳的統治の構造を維持することが必要であった。キリストの死は、この二つの目的を遂行する役目を果たした。

グロティウスによれば、キリストの死は、人類の罪に所属するべきであった刑罰の代わりとしてキリスト

に負わせられた刑罰である、という意味ではない。グロティウスは、むしろキリストの死を一つの刑罰の代わりと見た。つまりキリストの死を通して神は、もし我々が罪を犯し続けるなら、神の正義が何を求めるかを示したのである。キリストが負った苦難の光景は、罪を犯すことをやめさせるのに十分である。そしてもし我々が罪から離れるなら、罪を赦してもらうことができ、神の道徳的統治は保たれる。すると、キリストの死のゆえに、宇宙の道徳的性格を破ることなしに、神は赦すことができることになる。

統治説を調査するときに気づく一つのことは、はっきりした聖書的根拠を欠いているということである。むしろ、弁護士精神が働いて聖書の一般的な諸原則に焦点をあて、それからある種の推論を引き出すのを見る。罪を赦す際に道徳的統治と律法が維持されるようにとの神の関心により、キリストの死が求められた、という説を直接支持するものとして引用される一箇所はイザヤ 42:21 である。「主は、ご自分の義のために、みおしえ（NIV では「彼の律法」または「彼の法」一訳注）を広め、これを輝かすことを望まれた」。しかしこれは贖罪思想そのものを扱っている聖句ではない。このように、他の諸説が贖罪の本質に関する明白な聖書の言明を採用して他よりもその言明を強調するのに対して、統治説は、聖書の一般的な教えと原則の中のあ

るものから、推論的に作業をしている。

賠償説: 罪と悪に対する勝利としての贖罪

教会の初期の歴史において標準的な見解と最も主張されてきた説は、いわゆる賠償説 (the ransom theory) である。グスタフ・アウレンはこれを古典的 (あるいは劇的—監修者注) 見解と呼んでおり、多くの点でこの名称は正しい。アンセルムスとアベラルドゥスの時代までそれがさまざまな形で教会の思想を支配していたからである。それはアウグスティヌスが贖罪を理解した最初のやり方さえあった。したがってこの説は彼の名前が与える強烈な名声を享受した。

賠償説を初期に発展させた重要な人物は、オリゲネスである。オリゲネスは聖書歴史を偉大な宇宙的ドラマの描写と見なした。善と悪の力との間の宇宙的格闘において悪魔が人間に対する支配を確立したとされる。サタンは世界の中で今、支配的な力である。世界的支配者として、その権威は簡単に無視することはできない。というのも、神は、悪魔が用いた諸方策を使うまでに身を落とすことはしないからである。神には、いくなれば人類を「盗み」返す気はない。オリゲネスと賠償説を支持する他の者たちとが最もより頼む聖句は、自分が来たのは、多くの人のための、贖いの代価 (a ransom) として自分のいのちを与えるためだというイエ

スの言葉(マタイ 20:28、マルコ 10:45)である。この代価は誰に払われたのであろうか。神にでないことは確かである。神がご自分に身代金 (a ransom) を払うことはない。むしろ、悪しき者に対して支払われたに違いない。身代金、すなわちイエスの魂が支払われるまで我々を捕えたのは悪しき者であったからである。オリゲネスによると、サタンは自分がイエスの魂の主人になることができると考えた。しかしイエスの復活がその逆であることを証明したのである。オリゲネスはまた、ほかの所で示唆したことであるが、悪魔は、キリストの教えと奇蹟によって部分的には解放された人類が、その死と復活によって完全に救出されることに気づかなかった。そこでサタンは人類を解き放したが、結局は、人類と引き換えに受け入れたキリストを捕まえておけないことに気づいたのであった。

しかしながら、聖書は身代金がサタンに支払われたとは教えておらず、我々を律法の呪いから解放するためにキリストは身代わりとなられたことを教えている(ローマ 6:6-8、ガラテヤ 3:13)。キリストは、我々の罪に対する刑罰を引き受け、究極的に律法の正当な要求のすべてを満たすことにより、我々に対するサタンの支配権をその根元から無力化した。その支配権が我々を律法の呪いと非難の下に置くことによってもたらされていたからである。それゆえ、キ

リストの死は真の意味で悪の力に対する神の勝利であった。そしてそれは身代わりの犠牲によるものであった。

償罪説: 御父に対する償いとしての贖罪

本章を調べているすべての説の中で、キリストの死の主要な影響を最も明白かつ客観的なものと見なすものは、一般に商業的贖罪説 (the commercial theory) とか償罪説 (the satisfaction theory) と呼ばれる。それは、キリストが死んだのは父なる神の本性そのものの中にある原則を満たすためであるということを強調する。したがって、贖罪はいかなる形であれサタンへの支払いを含まなかった。

アンセルムスは主著である『クール・デウス・ホモ (神は何ゆえに人間となったか)』で贖罪を扱っている。その表題は論文の基本的方向を示している。アンセルムスは、そもそも神がなぜ人の本性をとったかを見いだそうと試みる。アンセルムスの贖罪理解は、基本的には彼の罪観に基づいている。罪とは、基本的には、神に帰すべきものを神にささげ損なうことである。我々罪人は、神から取ったものを神に返さなければならない。しかし、持ち去ったものをただ返せば十分というわけでもない。神のものを取ることで、神を傷つけたからである。そして取ったものが返されたあとでも、負わせた損害についてなんらかの償いまたは補

償をしなければならない。これと比較できるよい例は、窃盗犯は被害者の財産を回復することに加えて、懲罰的損害賠償金を支払うか刑期を全うしなければならない、と規定する現代の司法判断である。

神の侵害された栄誉は、神が人類を罰する（有罪判決を下す）か、あるいは彼らのためになされた償いを受け入れることによって再び正しくされる。この償いはどのようにして達成されるのか。人間が自分たちのために償いを行えるはずはなかった。最善を尽くしたとしても、神に帰すべきものを神に与えたにすぎないからである。償いが効果的であるためには、すべての被造物がなしうることよりも大きな償いがなされなければならなかった。被造物にはすでに要求されたことしかできないからである。そうであるとすると、神だけが償いをすることができた。しかしながら、もしそれが神との関係で人間の役に立つべきであるとすれば、人によってなされなければならない。それゆえ、償いは、神であると同時に人である誰かによってなされなければならない。結果として、受肉が論理的必然となる。

神であり、同時に罪のない人であるキリストは、死を受けるに値しない。それゆえ、キリストがご自分のいのちをその一員である人類のために神にささげることは、彼に要求される以上のことであった。したがって、人類の罪のための神への純粋な

償いの役目を果たすことができた。

しかしそれは、必要とされたことを成し遂げるのに十分であったのであろうか。もちろん十分であった。なぜなら、神=人である方ご自身の死は、神として自らのいのちを支配する力を持ち（ヨハネ 10:18）、死ぬ必要はなかったゆえ、無限の価値をもっている。実に、彼のからだは少しでも傷を受けたのなら、それは無限の価値に関わることであった。

キリストの死が多様な形で解釈されることを見てきた。今まで調べた説のそれぞれは、キリストのみわざの意義深い側面をとらえている。我々はいくつかに対しておもに反論するかもしれないが、各説が真理の一側面をもっていることは認めるものである。その死においてキリストは、①神が我々に望む献身の完全な模範を与えてくれた、②神の愛の大きな広がりを示した、③罪の深刻さと神の義の峻厳さを強調した、④罪と死との力に勝利し、我々をそこから解放した、⑤我々の罪のために父なる神に償いをした。これらのすべてを我々人間はしてもらう必要があり、キリストは全部したのである。ここで問わなければならない。このうちで最も基本的なものは何か、他のものを可能にするのはどれか、と。次章でこの疑問を取り扱う。その作業を行うにつれて、父なる神との交わりに我々を入れるためにキリストがなしたことを十分に深く認識するようになるであろう。